弘前大学医学部附属病院 Hirosaki University Hospital Bull 2003年(平成15年)9月30日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：鈴木唯司病院長）

〒036-8563　弘前市本町53
弘前大学医学部附属病院
TEL0172-33-5111（代表）FAX0172-39-5189

弘大病院広報
南塘（なんとう）だより
第31号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

病院長からの一言

弘前大学医学部
附属病院長
鈴木　唯司

いよいよ「新医師臨床研修制度」に基づいた卒後２年間にわたる医師の臨床研修が平成１６年度より開始されます。

これまでややもすれば基本的研修よりは専門的研修が重要視されてきたとの反省から，内科，外科，救急を中心に小児科，産婦人科及び精神科及び地域医療が必修科目となります。又，研修医に充分な給与を与えることは，インターン制度が崩壊して以来の課題でしたので，厚生労働省が月３０万円程度の給与を提案したことは評価されますが，財務省がどこまで認めるか，認めなければどうするか，なお流動的です。最も複雑なのは研修医の希望と研修病院の希望を全国的にマッチさせて研修先を決定する制度が部分的ではありますが取り入れられる事になりました。研修医は出身地（大学）を離れて，各地で他大学出身者と交じり合いながら競って研修をした方が良いと言う考え方が基にあります。そう言えば，昔のインターン制度では各地の病院で異なる大学出身のインターン生が交じり合って研修したものでした。青森県においても医学部附属病院を含め９研修病院(群)が指定されましたが，なお地域的問題が残ります。これまでも弘前大学医学部卒業者の県内に残る率は５０％前後でした。完全なるマッチングシステムになるとこれまで以上に関東等大都会の大病院に集中するのではないかとの疑いがあります。私共はこれまで以上に地域を目指した研修の優れた点をアピールする事が大事ですし，その為にも指導医の努力が必要です。そうして指導医にも充分な報酬が与えられなければならないでしょう。

第3回 弘前大学医学部附属病院卒後臨床研修教育ワークショップ

卒後臨床研修センター　大沢　弘

第３回弘前大学医学部附属病院卒後臨床研修教育ワークショップは，８月９・１０日の２日間にわたり十和田湖畔のホテルアズヴェールで行われた。台風１０号が接近する悪天候の中，鈴木病院長，新川卒後臨床研修センター長をディレクターとして，院内各科・部の教官１７名と関連病院の指導医12名，オブザーバーとして元村学務主任，タスクフォースと呼ばれる外部講師２名（日赤武蔵野短大畑尾正彦教授，高知医科大　倉本　秋教授），サポート役のコーディネーター２名（坂井手術部副部長，大沢）と事務職員５名が参加した。参加者は７名程度の４つのグループに分かれグループ毎に，経験すべき基本的手技、インフォームドコンセント（セカンドオピニオンも含む），症例提示，安全管理のいずれかの課題について研修医に２週間のオリエンテーション期間中に教育する場合を想定し，研修プログラムを作った。あまり面識がない者同士，また役職も異なる者で構成されたグループでいきなりプログラムを作るのは無謀という声も聞かれたが，タスクフォースにうまく乗せられながら，アイスブレーキングという方法でグループ内のまとまりを徐々に作りつつ，教育原理・理論に基づいたカリキュラムの作成が行われた。卒後臨床研修に求められるものとその対応というテーマでＫ－Ｊ法，二次元展開法という手法を用いた現状の問題点分析と具体的対策についての考察も行われたが，この二つの手法は病院（組織）の諸問題の解決にも応用可能なものと思われた。総合討論では，現場指導医の負担が増加する中で，どのように研修医を教育するべきか，あるいはなぜ教育しなくてはならないのか，研修医には診てもらいたくないと思う患者さんが少なくない現状を考えると行政がもっと国民(患者)に研修医制度を理解してもらうような働きかけをすべきではないか，卒前教育との連携をどうするか，オリエンテーション終了後の研修医の基本的手技があまりにもpoorでないか，等の問題について議論が行われた。

このワークショップは学会のそれとはかなり趣を異にしており，いわば合宿形式のセミナーで，朝早くから夜遅くまで寝る暇もなく？ グループ討論，全体発表を繰り返しながら研修プログラムを作る，その上懇親会もあるというハードなものだが，グループ作業を通じて個人の力では得られることが出来ない作業プロダクト（成果）が生まれるという特色がある。さらに各参加者は危機的状況下で生存するために集団の意思決定はどうあるべきかというトレーニング？も受けたが，その詳細と，何故十和田湖でしかも休日にやらなければいけないかという理由については，ここで述べると今後の参加者の楽しみを奪いかねないので省略する。

診療科の紹介【整形外科】

整形外科学教室は昨年２月に藤教授による新体制となり，２年目の現在，原田教授時代の伝統を引き継ぎながらも新しい試みをふんだんに取り入れた体制が整いつつあります。教室の専門チームは色別にグループ分けされています。脊椎脊髄疾患の赤班，股関節疾患の緑班，スポーツ疾患・膝疾患の青班，手の外科・マイクロサージャリーの黄色班で各班ごとに精力的に臨床や実験に取り組んでおります。近年，医療の進歩に伴い疾患や治療対象部位が細分化される傾向があり従来の色別グループ単独で対応できない場合や重複する場合も有りますが，本来気がよく仲良しの教室員ばかりですのでうまく調節しながら力を合わせて治療に当たっております。他科との重複部門をどのように住み分けしてゆくかが今後の問題となりそうです。最近の話題として整形外科脊椎脊髄専門医制度が発足し，本邦では脊椎脊髄外科は整形外科医が伝統的に治療研究を行ってきたことを広く一般の方に知って貰える事になると思います。

教室の方針として積極的に海外との交流が行なわれ，教室員全員が英会話の特訓中です。現在アメリカとイタリアに計３名の医師が派遣され，トルコから１名の医師が当教室で研修しております。

整形外科における手術技術や手術材料の進歩はめざましく，我々はその変化に乗り遅れないように知識を吸収し，技術を身につけてゆかなくてはなりません。当教室では年１０回の月例会（洋書の輪読，症例検討会）と有名講師による講演会を主催しております。さらに各班とも自主的な抄読会の開催や国内外の研修に積極的に参加して教室の活力となっております。さらに特筆すべきは臨床実習医学生との交流会です。各実習グループを対象に毎回開催しております。この会は教室の紹介や進路相談だけではなく，教授の和やかな人柄に乗せられて，音楽，政治，スポーツの話などさまざまな話題が飛び出し仕事の良い息抜きとなっています。時には研修医の本音も聞くことができて大変楽しい一時です。学生さんとの交流だけでなく教室員同士にもよい親睦の機会になっているようです。これからも教室員一同，切磋琢磨して良い整形外科医を目指してがんばってゆきたいと思います。　（整形外科）

先憂後楽

「先憂後楽」

耳鼻咽喉科
石　井　賢　治

「先憂後楽」とは広辞苑によれば，「天下の安危について，人より先に憂え，人より後に楽しむこと」とあります。先を読んで手を打つ事によって良い結果を得る，と考えれば良いでしょうか。もともとは政治家の心構えを説いた言葉ですが，医療者においても大事な心構えと思います。

昔の中国の医者は旅をし，その途で診療をしていました。旅から旅を続ける彼等にとって患者の今後の病態を予測することは必要不可欠であり，この薬を飲めば数時間後にこうなり，翌日にはこうなる。そうしたら次はこの薬を飲みなさい。３日後には全快します。と，このようだったわけです。「先憂後楽」を常としていたわけです。

以前，私が勤務していた病院でのことです。開業医の耳鼻科の先生から当直中の私に電話があり，「バイクで転んだ男性が頭部を打撲し鼓膜穿孔を生じている。頭蓋内は大丈夫だと思うけど送るから診てくれ。」とのことでした。患者が来ると，外傷も無く意識レベルは正常で麻痺やしびれも無く，聴力もほとんど問題ありませんでした。穿孔の処置をしただけで明日の受診としました。深夜，当直室の電話が鳴り「夕方に来た外傷の患者の家族から電話で，意識がおかしいとのことです。」と，看護師からの報告。すぐに来てもらうと，レベルは１００，軽度の片麻痺が認められました。ＣＴを撮影したところ脳挫傷が認められました。すぐに脳外科にコンサルトし治療を開始していただきました。幸い改善して退院しましたが，実に苦い経験です。「先憂後楽」の逆を行ってしまったわけです。

今日，我々は今までに見られなかった疾患に直面しています。エボラ出血熱やＳＡＲＳ，多くの薬剤耐性菌の台頭など，挙げればきりがありません。特に今冬にはSARSの再流行が予測されます。今回も日本には来ない，などと言えるでしょうか。常に先を予測し「先憂後楽」の精神で臨みたいものです。

青森市立横内中学校生徒の病院訪問

看護部長　須藤明子

青森市立横内中学校２年生生徒３名の病院訪問が６月２６日にありました。「総合的な学習の時間」で，医師と看護師について勉強している，という女子生徒３名です。

訪問では，病棟見学はなく，（原文で）・カンファレンスではどのようなことを話し合うのですか，・看護師・医師の服に決まりはあるのですか，・どうして医師，看護師になりたいと思ったのですか，・どのような人がおもに運ばれてくるのですか，という質問をさせていただきますのでよろしくお願いします，ということでした。

計画では，病院長が１０時半から３０分，看護部長が次の30分，昼食のあと，学務課に医学生を訪れることになっていました（ようです）。私は病院長室での３０分の予定が１時間にもなりはらはらしていたのですが，本人たちは動じる様子もなく･･･。昼食時間がなくなったんでしょうか？

各々が何を質問するかを決めていて次々と質問がありました。内容は，看護師になるための教育課程について，どういう勉強をしたらいいんですかから始まって，就職状況について，就職してすぐやめる人がいると聞いていますが，本院でもやめる人はいますか，何故ですか。勤務・業務内容について，1日にどういう仕事をだれがどのようにするのですか。勤務時間・交代制勤務とは，役職というのはなんですか，質の高い医療・看護とは何ですか，看護体験はできますか等々。質疑応答の中から関連することについて次の質問を展開できる，コミュニケーション能力の高さには感心させられました。体験し感じた，というだけでない学びがあったと思います。

学校が段階的に実施しているという「総合的な学習の時間」に，期待したいという思いを持った時間でした。

リスクマネジメント講演会を開催

・　弘前大学医学部附属病院医療安全推進室では，７月１１日に医学部臨床大講義室において，医師で弁護士でもある慶應義塾大学の古川俊治氏を講師に迎え「信頼される医療をめざしてー説明責任と記録ー」と題して講演会を開催した。

・　古川氏は約２時間にわたり，インフォームド・コンセント，適正な医療情報の提供，悪い結果についての説明責任及び医療事故の報告と情報公開について，説明された。

・　医療事故を防止するには，組織的な安全管理システムの改善と個人の意識の改革が必要と力説された。

・　また，質疑応答も活発に行われ，参加者からは医療事故防止に関する認識を新たにし，信頼される医療をめざすとの声が多く寄せられ，関心の高さを物語っていた。

・　今回で４回目となるリスクマネジメント講習会には，医師，看護師，薬剤師，検査技師及び放射線技師等医療従事者約２７０名を超える参加者が詰めかけ熱心に聴講した。　（医事課）

褥瘡対策チームの活動状況

皮膚科　水木大介

・　昨年実施された診療報酬改正により，（１）褥瘡対策チームを設置すること，（２）すべての入院患者について診療計画書を作成すること，（３）体圧分散マットレスを配備すること，の３点が義務付けられました。この改正にあわせて，当院でも褥瘡対策チームを結成し，院内の褥瘡対策に当たっています。

チームは医師３名，看護師５名で構成されており，月１回の会議では，院内で発生した褥瘡患者一人一人について検討し，月毎に褥瘡発生率を集計しています。また，褥瘡患者が発生した場合，褥瘡対策専任医師と専任看護師，栄養士の３名で褥瘡回診を行っています。回診では，重症度の判定，体圧の測定を行い，回診後には褥瘡対策のアドバイスを行っています。

当院の褥瘡発生率は徐々に低下し，現在では１%前後になっています。これは，病院職員が褥瘡対策に真剣に取り組んでいる表れであると思います。褥瘡には多くの要因が関与しており，簡単には解決しない問題も多く抱えています。今後，これらの問題を減らしていけるよう，チームの活動を続けていきたいと考えています。

旧中央診療棟等のとりこわしについて

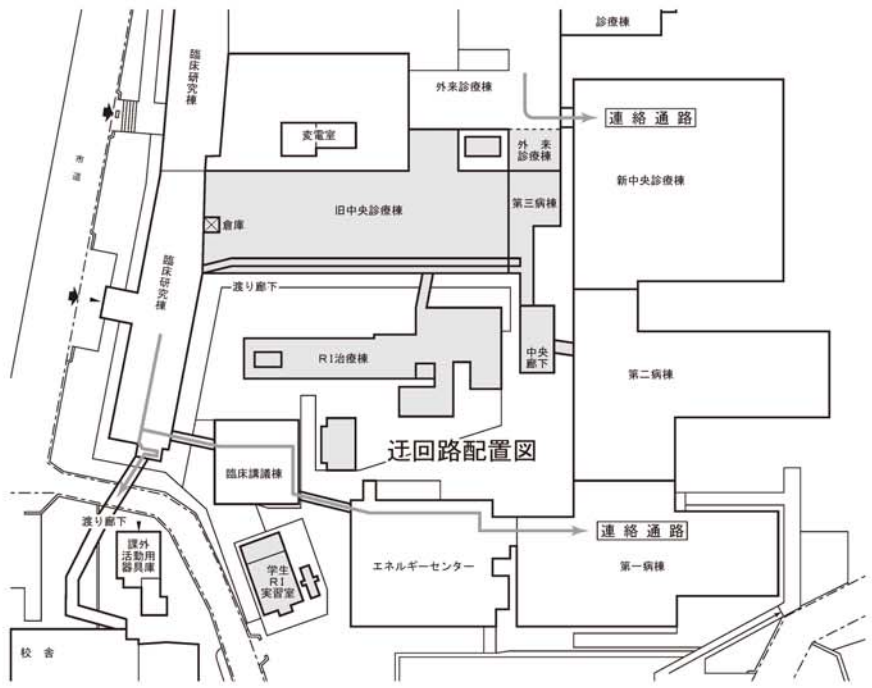
附属病院の再開発計画が昭和６１年から始まり，最後に残った新外来診療棟建設予定地にある「旧中央診療棟，ＲＩ治療棟等」のとりこわしが、下記の予定にて始まりました。

◆工事名
弘前大学（医病）旧中央診療棟
その他とりこわし工事

◆工　期
着　工　Ｈ１５．７．１６
しゅん工　Ｈ１６．３．２５

◆取り壊し建物

旧中央診療棟	S44完成	R6	9,664・
ＲＩ治療棟	S47完成	R2	1,260・
	S55,S59完成	R1	200・
ＲＩ学生実習室	S43,S47完成	R1	182・
中央廊下	S39完成	R6	783・
第三病棟	S41完成	R6	1,644・
外来診療棟	480・		
仮設渡り廊下（第二病棟～中央廊下）		S2-1	51・
〃（臨床研究棟～第三病棟）		S1	134・
合計	１４，３９８・（別図）		



以上がとりこわし建物の概要ですが，とりこわし工事のほかに，支障切り回しとして電気設備工事，機械設備工事も始まっています。

なお，工事期間が平成１６年３月までと長期となり騒音等により，ご迷惑をおかけしますがご協力のほどよろしくお願いいたします。

今回の工事中外来診療棟及び臨床研究棟等と新中央診療棟及び病棟との，連絡通路が少なく皆様方にはご不便をおかけしますが，合わせてご協力のほどお願いいたします。

とりこわしに当たり顧みますと，旧中央診療棟は昭和５２年８月の水害により，現地下２階電気室・機械室が約１.５ｍも水没し機能が完全に停止したことがありました。

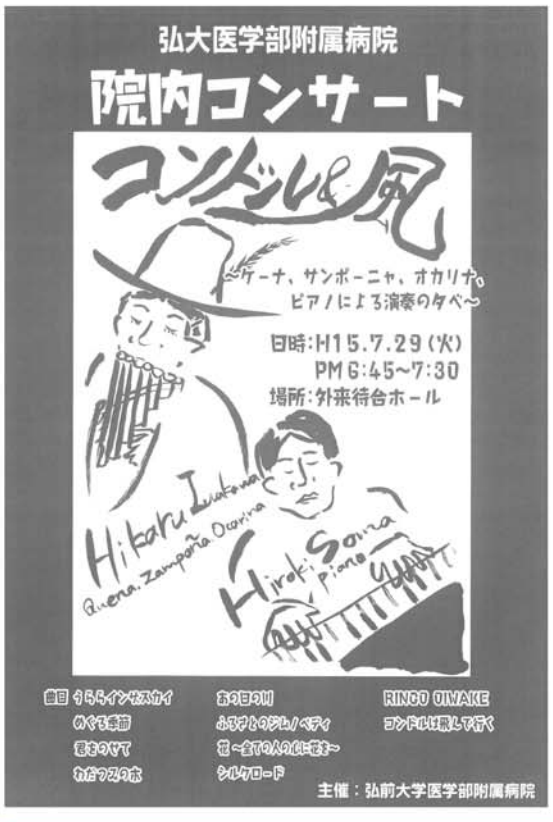
それからの復旧・支援等に携わった人たちにとっては，忘れられない思い出ではないでしょうか。

それ以前・以降にもそれぞれの建物にはいろんな思い出があると思いますが，活躍した旧建物に感謝の念を込めて「ありがとう」と言わせてもらい終わりとさせていただきます。（管理課）

院内コンサート開催「コンドル＆風」～素朴なケーナの響き堪能～

患者サービスの一環として，今年度２回目の院内コンサートが７月２９日（火），18時45分から外来待合いホールで開かれました。

今回のゲストは「コンドル＆風」。岩川光さん（弘前大学教育学部附属中学校３年）と相馬寛樹さん（同理工学部３年）のデュオを迎えてのコンサートでした。



デュオの名前の由来は，南米ペルー・アンデス山脈を悠然と飛翔するコンドルのイメージからきているとのこと。

開演に当たって，鈴木病院長から「しばらくの間，若いデュオが奏でるケーナ，オカリナ，サンポーニャとピアノによる美しい調べを楽しんで下さい」との挨拶がありました。

コンサートでは，岩川さんの中学生とは思えないような達者なトークとともに，『わだつみの木』『花ー全ての人の心に花を』『シルクロード』などお馴染みの10曲を熱演。ケーナ，サンポーニャなど南米の民族音楽特有の素朴な中にも味わい深く哀愁を帯びた音色が会場の隅々まで響き渡っていました。なかでもフォルクローレの名曲『コンドルは飛んで行く』は，あたかもアンデスの空と風の中に身を置かれているかのような心地よさを感じさせてくれました。

また，アンコール曲として披露された『RINGO OIWAKE』のジャズバージョンは圧巻。演奏終了後もしばらくは感動の拍手が鳴りやみませんでした。約５０分の楽しくも名残惜しいコンサートでした。

次回の院内コンサートは，10月上旬の開催を予定しています。（医事課）

弘前ねぷたまつり

津軽地方の伝統行事「弘前ねぷたまつり」に，今年も本学のねぷたが，全学共通レクリエーション事業の一環として出陣しました。本学のねぷたまつり参加は，昭和３９年初参加以来，連続４０回目となり，今年は，１日，４日，６日の３日間出陣しました。参加初日は，医学部附属病院構内において，小児科をはじめ，入院中の患者様や弘前大学長，医師，看護師，事務職員等による「小ねぷた」が運行され，小児科に入院中の子供達は本学職員手作りの扇ねぷたを手に持ち「ヤーヤドー」の掛け声に合わせ，津軽の短い夏のひとときを楽しんでいただきました。

今年の弘前ねぷたまつり期間中，本学のねぷたは，多数の教職員，近隣町会の子供達等の参加を得て，弘前市内を練り歩き，沿道の観客から大きな喝采を受け，津軽の夏祭りを盛り上げました。　（総務課）

【編集後記】

・　今年の夏は長雨そして低温続きと梅雨も明けずに秋になってしまい早くも紅葉が始まっています。

皆様に南塘だより第３１号をお届けいたします。お忙しい中、寄稿いただきました皆様に心から感謝申し上げます。

旧中央診療棟の取り壊しも始まります。また、外来棟の新築へ一歩近づく基本設計の予算が認められ９月から設計に入っています。すばらしい病院建築のため施設部との連絡調整会をつくり意見交換を行っています。

８月３０日、３１日に第３２回東北地区国立大学病院野球大会が弘前大学を当番校として弘前市運動公園野球場にて開催され我が弘前大学が見事優勝しました。おめでとうございます。

実りの秋、おいしいものを食べ体力をつけ、１６年４月からの独立行政法人化に向け頑張りましょう。

（事務部Ｋ・Ｉ）